
泡沫-ウタカタ-

一二三五六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泡沫ーウタカター

【Nコード】

N7099N

【作者名】

一二三五六

【あらすじ】

偶然とか奇跡とか、そういうものは信用ならない。

よく、マンガやアニメ、小説やドラマなんかでは最後の最後に都合主義の奇跡や偶然が起こるけれど、しかしぼくはそれがどうにも納得いかない。結果があるのなら、それに然るべき切っ掛けがあるべきだと、そう考えていた。

だけれど、どうやらそれを改めなければならぬらしい。

奇跡は、偶然は確かに存在した。

人生っていうのは、本当に何が起きるかわからない。

ぼくは今、心の底からそう思う。

ぼくはひょんなことから、好意を寄せている女の子——絹川翠とメールのやり取りをすることになった。

※行間を一行空けて、少し内容も修正しました。若干読みやすくなったのではないかと思います。

プロローグ…無題

絵空事のような夢。

夢にも満たない願望。

自分にとって大切な日々が延々と繰り返されればいいのにと、何にでもなくぼやいていた。

変わらない日々をずっと望んでいた。

平穏な毎日を尊んでいた。

しかしだからこそ、私の人生には平穏と呼べる生活が、停滞と呼べる安息が、あまりにも少なかった。

平穏を望んだからこうなったのか。

あるいはこうなったから平穏を望んだのか。

それは、もうわからない。

この慌ただしく過ぎていく日々になんか流暢なことを考えている暇などなかったし、日々埋もれていく記憶の中で私は考えることを止めていた。

——ただ、私は今こうして、平穏を望んでいる。

いくら不可能だと言われても、それでも私は本当の笑顔で生きて

いたい。心から笑える自分でいたい。

例えそれで——私の身近にいる人が不運に巻き込まれたとしても。

なんて自己中心的で我が儘で横暴な考えなんだろうと、自分でも思う。

でも、もうどうしようもない。

私の中で燻っていた焦燥が、今にも飛び出しそうな勢いで暴れていてどうにも止まらない。不安と焦りと高揚で、私の胸が圧迫されていく。

もう、押さえ込むことは不可能だ。

元より、抱えたままに生きていくこと自体が無茶なのだから。

人並みの幸福なんて、知らなければ良かった。

そんなことを思ったこともあった。

あの暖かな幸福感は、今までの価値観を全て台無しにしたから。

だけど……

だから——

一話：始まり？ 始まり！（前書き）

『おはよう

もう夏休みだね』

樹理くんはどこか旅行に行ったりするのかな？

あたしは、両親が二人とも夏休み返上で働いているので、今年もどこにも行けないみたいです

まだ一人旅する勇気もないからね。たはは……。

ではでは、よい休日を』

一話：始まり？ 始まり！

朝。いつからか絹川からのメールで起きるのが日課になっていた。とは言っても、絹川とメールするようになったのは一ヶ月くらい前の話なのだから、『いつから』なんてのは大体予想ができるのだけだ。

欠伸をしつつ、寝呆け頭でメールの返事を打つ。

しかしそう言えば、絹川とメールのやり取りを始めてもう一ヶ月になるのか。そう考えると何か感慨深いものがあるけど、んー、ものの見事に何も進展していない。好意を寄せている女の子のメルアドを知ってるっていう、結構有利な接点を持っているはずなのに、何も行動に移せていないばかりは、案外奥手なのかもしれない。

まあ、確かに積極的な方ではないのだけど。

っていうかばく、さっきから『けど』を遣いすぎだと思う。何だ？ 逆説好きなのか？

取り敢えず閑話休題。

ふむ、一応ここで自己紹介をしておこう。

まあ、そんなことをしたところでいったい何人の人物が聞いて（あるいは読んで）いるのかは全くの不明だし、もしかしたら、誰の目に止まることもなく一人で自己紹介をする、という醜態を晒しているのかもしれない。……いや、誰も見ていなかったら醜態を『晒す』ことにはならないのかな？ つまり、ぼくが醜態を晒した

としてもそれは闇に隠匿されるわけだ。そして、誰かが見ていれば
ぼくの行動が醜態となることもない。ということは、結局どっちに
転んだとしても、ぼくが誰かに後ろ指を指されるという結果は絶対
にあり得ないというわけだっ!!

.....。

というわけで、自己紹介します。えー、ここで自分の主観を垂れ
流しにして自己の価値観を押し付け、自分勝手な自己満足を楽しん
でおりますはこのワタクシ——自称ぼくこと、蓼科樹理であります。

体重はどちらかと言えば軽い方。髪は黒く少し長めで、女顔だと
よく言われる。いつも前髪を二本の黄色いヘアピンで止めていて、
初対面の人からは大抵女の子と間違えられるけれど、正真正銘日本
男児です。

趣味は寝ること。可能ならば土日はずっと寝て過ごしたいくらい
大好き。

座右の銘は『果報は寝て待て』。……え？ いや、別に言葉の中
に『寝て』って入っているからじゃないですよ？

——うーむ、自分のことを説明するってのはなかなかどうして難
しいですなあ。やっぱり主観ってやつは自分勝手に解釈しているこ
とが多いし、自分のことはそこまで見えていないんだろう。

ザ・灯台もと暗し。

メールを返信し終え、洗面所でしゃしゃこと歯を磨いていると、
姉貴がこっちに来る様子が鏡越しに見えた。大きめのスウェットを

ずるずると引き摺りながら、陰鬱とした表情で近付いてくる。大方、彼氏に振られた当て付けに自棄酒でもしたのだろう。あの様子は完全に二日酔いのそれだ。

「……うーっす」

「おはよう。顔色相当悪いよ？」

言ってみたものの、歯ブラシをくわえっぱなしだったために、きちんとした言葉として伝わったかはわからない。だけど「ううん、そう？」と姉貴が首を傾げたので、たぶん意味は伝わったのではないだろうか。

コップの水で口内を濯ぎ、吐き出す。

「ま、若いんだし無茶するのもいいけど、程々にしときなよ？ お酒なんてつまるところ、毒素の薄い麻薬みたいなものなんだからさ」

「うー、お前はお酒の魔力を知らないからそんなことが言えんのかな」

「魔力なんですよ？ 『魔』なんてのは悪い物の象徴じゃん。やっぱりやめた方が身の為だよ。文字通り、ね」

タバコ吸ってないだけマシだけど、と言い残して洗面所を後にする。姉貴がぼくの背中に何かを力なく喚いていたけど、無視して廊下を通ってリビングへ。

「——はよー……って、あれ？」

リビングには誰もいなかった。

お母さんも、勿論お父さんも。

はて？ と首を捻りつつ時計を確認すると、時刻は午前八時。いつもなら、もう起きている時間だ。お父さんはもう仕事に行っているはずなので、いなくて当然と言えば当然なのだけれど、お母さんがいないのはおかしい。今日に限って寝坊した、ということもないだろう。つーことは、なんだ？ もしや家出か？

と、そこまで考えが及んだところで、昨夜、旅行に行くみたいなお母さんが言っていたことを思い出す。

『お母さん明日から一週間くらい友達と温泉旅行行ってくるから。その間、三人で仲良くね』

うん、確かそんなだったような気がする。夏休みなのに、出掛ける予定の無いぼくを馬鹿にするかのような、見下した笑いを僅かながらに浮かべてそんなことを言いやがったのだ。イラッとして、旅行バッグの中にバタフライナイフを忍ばせたような覚えがあるから、たぶん間違いない。今頃は空港で持ち物検査に引っ掛かっていることだろう。

しかし、思い出したら何気ないことだった。特別気に掛けることじゃない。戸棚から食パンを一切れ取り出して嚙り付き、椅子に座ってテレビの電源を入れる。

丁度、ニュースをやっていた。

内容は一週間前の、ぼくの通う高校で——いや、通っていた高校

で起きた無差別殺人事件だ。

死亡者の数は、教师生徒合わせておよそ五百人。怪我人を含めると、たぶん学校関係者全員が被害者だと言っているだろう。ぼくは当事者ではないからよく知らないのだけど、聞くところによると、何の理由も無しに学校を襲撃して学校内の人間を無差別に日本刀で斬り付けた挙げ句、爪先から髪の毛一本までをバラバラにズタズタにされた死体として犯人が校舎裏で発見される、という奇妙な事件だったらしい。その事件の所為でぼく達は転校を余儀なくされ、舞台となった高校は取り壊されることとなったのだ。

犯人の素性は、公表されていない。人権保護で規制されているのか、はたまた犯人の詳細を掴めていないのか。噂では、正体が掴めないというよりは、元々正体自体が存在しないから公表出来ないみたいな感じなのだそうだ。

更に噂によると、その事件を解決したのは二人の高校生だという。けどまあ、これは噂の尾鰭の部分——つまり、面白半分に付け足された嘘だろう。そんな少年漫画、あるいは推理小説のような展開があつてたまるか。警察ですら手子摺っていた相手に一介の高校生が勝る、なんて道理は通らない。

因みに、その事件当日、ぼくは夏風邪で学校を休み病院に行っていた。夏風邪様様と言うかなんと言うか。まあ、当然の如く、警察関係の方々に色々取り調べをされたけど（あれはトラウマものです）。

しかしぼく以外の生徒は、当然その事件の当事者となっており、そしてそれはぼくが好意を寄せている相手——絹川翠も例外ではない。メールの文面からはわからないけれど、何らかのショックを受

けているに違いない。何せ、事件——それも無差別殺人事件だ——に否応なしに巻き込まれたのだ。ぼくだったら、家の中に引き籠もってしまってもおかしくない。

と、テレビの画面を睨みながら思考を巡らせていると、いつの間にやってきたのかぼくの横に立っていた姉貴が、ぼくの手からリモコンを奪い取り、チャンネルを変えた。

「朝からそんな陰鬱としたもの見ないでよ。気が滅入るじゃない」

「陰鬱さ加減なら、さっきまでの姉貴の顔とどっこいだよ。二日酔いはもう良いの？」

「ん、まだちいーっと吐き気がするけど……うん。大丈夫」

「ふーん。それは重畳。あ、そうそう。今日から一週間お母さんいないから、ご飯は当番制だよ」

うえ、と嫌そうに顔をしかめ冷蔵庫からスポーツドリンクを取り出す姉貴。昨日はそんな物無かったから、たぶん二日酔いになることを見越して姉貴が買ってきていたのだろう。どんだけ準備が いいんだ？ コイツ。

「じゃ、ぼくはちょっと出掛けてくるよ」

そう言って、椅子から腰を上げながら、最後の一口となったパンを口に放り込む。

「行く宛てなんてどこにも無いくせに？」

「うっさい」

憎たらしく笑んで嫌味を言う姉貴とリビングを後にして、廊下を通り玄関に向かう。靴を履いて鉄製のドアを押し開け、外へと出動。

日中なら肌がジリジリと痛くなるだろう日射しも、今はそこまで強くない。夏と言えど、やはり朝はあまり暑くないからいい。ひぐらしの鳴き声に耳を傾けつつ、適当にぶらぶらと住宅街を進んでいく。

と、前方から二人組が手を繋いで歩いてくるのが見えた。

一人は小学生くらいの女の子。可愛らしい容姿をしているけれど、しかしそれとは対照的に大人びた雰囲気を持っている。

もう一人は、知っている。椎名美月という名前であり、前の学校でのぼくのクラスメイトで、そして今度の学校でのぼくのクラスメイトでもあるらしい。基本的に女の子との会話を苦手とするぼくが、気楽に話し掛けることのできる数少ない女の子。いつもは、「他人なんて関係ない」みたいなことを言いそうなほど無表情なのだけけれど、今日は気恥ずかしそうな、だけどどこか嬉しそうな顔をして女の子に手を引かれている。

「ようっす」

片手を上げて軽く挨拶をする。

それでようやくこちらの存在に気付いたらしく、椎名はびくりと体を震わせて反応し、ぼくの顔を見て目を白黒させて、女の子と繋いでいた手を慌てて放した。

なんだろう？ 女の子と手を繋いで歩いているところを見られることに對して後ろめたいことでもあるのだろうか？ 確かにぼくみたいな男が小学生の女の子と手を繋いで歩いていれば、いろいろと『アレ』なのだけれど、でも椎名は一応女の子なわけだし、別に隠す必要はないと思うんだけどなあ。

とか何とか考えている内に、椎名は冷静さを取り戻したらしく、いつもの無表情に戻ってしまった。何だか少し損をした気分だ。動揺する椎名なんて滅多に見られないんだから、もっとしっかり見ておけばよかった……。

「おはようございます」

礼儀正しくお辞儀をしてくる椎名と、それに倣って頭を下げる女の子。今時の若者にしては珍しいくらいに礼儀正しい。椎名についてはいつもそうだから慣れているのだけど、小学生にまで頭を下げられるのは何だか落ち着かない。何かこう………自分の社会性に不安を覚えてくる。

「それでは」

「いやいや、ちょっと待とうよ」

去ろうとする椎名の肩を慌てて掴んで止める。

「なに？」

「いや、『なに？』ってクラスメイトに冷た過ぎやしないかい？ 椎名。夏休みに知り合いと偶然遭遇したら一言二言会話を弾ませる

のが常識でしょう」

「そんな常識知らないよ。それに一言二言では会話が弾んでいるとは言いません。ということで、それでは」

「いやいやいや」

再び、この場を離れようとした椎名の肩を掴んで引き止める。

「何なの？ セクハラで訴えるよ？」

「何でさ！ ……あ、いや言わなくていいです。大体予想できるから……」

肩を掴んだだけでセクハラ。現代社会の男も大変です。

——気を取り直して。

「椎名、こんな早くにどこ行くの？」

「セクハラで訴えるよ？」

「何でさ!!」

「なんとなく」

コイツ淡々としてるくせにボケてくる。何だろう、無表情だからなのか無性に怖いっ!!

なんて、椎名に戦慄を覚えていると、

「ちょっと散歩ついでに公園にね。急に夏休み早まっちゃったから、暇なんだよね」

そう答えてくれた。

無表情だからつんけんしているように感じるけれど、椎名は意外と優しい。甘い、とも言う。

「ふーん」

しかし、暇だからって、それが早起きしてまで公園に行く理由にはならないと思うのはぼくだけだろうか。……ま、ぼくも似たようなものだけどさ。

「自分から聞いたいてそんな反応はないと思うんだけど」

「んー、確かにそうだけど、でも正直あれ意外の反応思い付かなかった」

いや、思い付かないこともなかったけど、言ったら絶対怒るだろうし。

……………怒る？ 無表情な椎名が？ やば、ちょっと見てみたいっ！

「何か今、物凄く失礼なこと考えてないかな？」

「んにゃ」

失礼……ではないと思う。

椎名はしばらくぼくを睨んだ——とは言ってもただぼくを直視していたただけけど——後、「まあ、いいや」と溜息を零し、

「もう満足した？」

と聞いてきた。

「うん」

と頷く。

ぶっちゃけると、ただ単に暇だったただけだし。

「じゃあ、行くね」

「ういゝ」

お互いに手を振って別れる。

再び女の子と手を繋いで歩きだす椎名を見送りながら、考える。

さてさて、ぼくはどこに行こうか……。

二話：ハイセンスな二人（前書き）

『なんだ』

樹理くんも私と一緒にかあ

何だかホッとしたようながっかりしたような……。あはは

……ま、高校生だって言っても普通はこうだよね！

付き合ってる人達だって少数派だよっ！！

……きつと、たぶん……

寂しい夏休みだけど、お互いに出来る限り満喫しましょー
では〜』

二話：ハイセンスな二人

「……ふう、やっぱりここに来てしまったか……」

嘆息してみる。

眼前に聳えるは今にも跡形もなく瓦解してしまいそうな廃墟——
もとい古ぼけて廃墟のように見える一棟のビル。

住宅街の中心くらいにあるばくの家から電車を乗り継いで約一時
間ほど掛かるここは、本当にギリギリのところだ。廃墟ではなく、一
応『西牟婁事務所』と言う名前を持った事務所だ。

一体どこの誰がこんな郊外の奥地にある廃墟同然の建物にやって
くるんだ、と言いたくなるような物件だけど、その実例が他でもな
いばく自身であるため、未だそんなことを言った試しはない。精々、
こんな所に事務所を立ち上げる人の気がしれない、とその張本人の
前で言っただけくらいだ。

「ふむ」

頷いて、押し開きのドアを潜る。

元々は小さな株式会社のビルだったのか、事務所の一階はロビー
になっているのだけど、そこには誰もいない。経営している人が一
人しかいないのだから当然と言えば当然なのだけど、毎回この事務
所を訪れこのロビーを見る度に物寂しさを覚えてしまう。何だか無
性に切なくなるのだ。

そんなロビーの真ん中を横断、あるいは縦断してエレベーターの脇にある階段を上る。

余談だけど、この廃墟で肝試しとかしたら楽しそうだと思う。本物が出て来そうな雰囲気だし。

そんなことを妄そ……考えながら階段を駆け上がり、最上階である六階の『魔女の館』と書かれた看板（何故かナイフとフォークのイラスト付き。しかも全然『館』じゃないし）の掛けられたドアの前に到着。馬鹿と何とかは高い所が好きと言うけれど、しかしそのお陰と言うべきなのか、むやみやたらと体力が付いてしまったなあ、とぼくは感慨深く思いました、まる。

……あれ？ 文の内容がぐにゃつと変な方向に曲がった気がする………けどまあ、気にしない気にしない。

コンコン、とドアを二回ノックする。

礼儀と礼節は大切。

程なくして、「入っていいぞー」といやに男前な女性の声。

持ち主の了解も得たのでノブを捻ってドアを開ける。

と。

「あれ？ お客さんですか？」

そこには二つの人影。

当然、一つはこの事務所の持ち主、白衣に緑髪のポニーテールという奇抜かつハイセンスなファッションの自称《魔女》——西牟婁枢さん。

そしてもう一つは、黒いワイシャツと同じく黒いズボン、それから両目を白い包帯で覆っているという、これまた奇抜かつハイセンスなファッションの人物だった。

そんな二人がテーブルを挟んでソファに座り、向かい合っていた。

「……まるで君自身が客ではないかのような物言いだな」

西牟婁さんが嘆息するように呟く。

「ぼくもはやレギュラーじゃないですか。当然ですよ」

「君をレギュラーにした覚えは全くないがな」

「えっ!？　じゃあもしかして、準レギュラーだったんですかっ!？」

「いや、観客だ」

「まさかの脇役以下!!」

「君ごときが画面に映れるとも思っていたのかい？」

ニヤニヤと意地悪顔で笑う西牟婁さん。

うう……、笑い声だけがお茶の間進出だなんて……。

因みに要約すると、

『ぼくもはや事務所の所員じゃないですか。当然ですよ』

『君を正式に雇用した覚えは全くないがな』

『えっ！？　じゃあもしかしてアルバイトだったんですかっ！？』

『いや、手伝いだ』

『まさかのただ働きっ！！』

『君ごときが給料を貰えるとも思っていたのかい？』

こんな感じ。

西牟婁さん、クールな雰囲気なのになかなかどうしてノリがいいのだ。

いつも通りの会話に満足して、うんうんと頷く。

と、そこでふと思い出す。

——あ、お客さんが来てたんだった。

ハッとしてお客さんを見ると、西牟婁さんを方を向いてジッとしていた。包帯で両目が隠れていることもあって無表情に見えるけれど、その顔が僅かに強ばっているから、たぶん驚いているんだろう。

確かに、あの西牟婁さんがさつきみたいな会話を繰り広げるなんて
思い難いもんなあ。しかし、当の西牟婁さんはその視線（？）に
全く気付いていない。それともあえて気付いていないフリをしてい
るのだろうか？

……………どちらにしてもお客さんが不憫だった。

「あの……、西牟婁さん。お客さんが困ってますよ？」

「ん？ ああ、そう言えばいたな、お前」

今思い出したみたいにお客さんの方に向き直り、そんなことを言
う西牟婁さん。

この物言いからして、わざと無視していたようだ。しかし、西牟
婁さんが『お前』呼ばわりするなんて珍しい。こんなぼくでさえ『
君』なのに。それと、今度は『しかし』が多い気がする。やっぱり
逆説好きなのだろうか。

……………ぼくって捻くれ者？

そんなぼく的心情に関係なく（いや、関係してたらそれはそれで
怖いけれど）、現実には進行していく。

「で、ウチの召使……おっと間違えた。召使改め奴隷が来たが、そ
れでも話を続けるか？」

……………事務所でのぼくの立場が著しく低下している。

「……はあ、わかりました。今日はここまでにしておきます。しか

し、貴女はぼくの妹だけでなくこんな子まで……」

ん？ 何だかお客さんの言葉に不穏な気配を感じたような……。

違和感に眉を下げるべく。

「勘違いしているようだが、コイツは男だぞ？」

透かさずお客さんの言葉に訂正を入れる西牟婁さん。

どうやらぼくは女の子とされていたらしい。いや、慣れていると言えは慣れているんだけど、やっぱり男として一抹のショックを拭いきれませんか。

「そうでしたか。それは何とも驚きですね」

お客さんの言動と挙動が全然違うと感じるのは、ぼくの目の錯覚なんだろうかと……あ、そーですか……。

「つまり、西牟婁さんは百合でシヨタコンだと」

そういうことではないんじゃないかと思う。

「コイツをシヨタだと言うのならお前も同類になるが、いいのか？」

西牟婁さんが悪戯っぽい笑みを浮かべる。

包帯で両目が隠れているからわかりづらいけど、確かにお客さんは女顔だ……ん？ ということはこの人男なのか？ 外見から声まで中性的過ぎたから特筆しなかったけど……そうか、男だったのか。

歳も同じくらいだし、何だか親近感湧くなあ。そして、西牟婁さんは本当に百合でシヨタコンなのだろうか。否定しなかったけども。

「それは困りますね」

お客さんの顔は変わらず無表情——だけど、本当に困っている雰囲気は伝わってきた。どうしよう。椎名のこともあるせいか、無表情な人の感情表現を理解してきているような気がする。

「だろうな。と言うか、お前はどこでそんな言葉覚えてくるんだ？ ニートのくせに」

最後の一言は必要だったのだろうか。

「伊織からですよ。誰も聞いてないのに一人で勝手に喋りだして、それを聞いている内に覚えました」

一人で勝手に喋りだすって……その《いおり》って人、なんか怖い。

「ああ……、相模原の小娘か。アイツは機械病患者だからな。必然、そういうのには詳しいんだろうな」

あれ？ 今、西牟婁さんの顔が渋ったような……。どうしたんだろう？

あと、《きかい病患者》って何？ 『きかい』って『器械』？ それとも『奇怪』？ どちらにしろ発症したくはない病気だ……。

「——っていうかい加減止めましょうよ、その意味不明な会話っ

！！ 突っ込みを我慢するのも疲れましたよっ！！」

思わず声を上げてしまう。しかし、当の本人たる二人は本心から何の変哲もない会話を繰り返しているつもりだったのだろう。よくわからない、といった風に眉を下げている。

「何に気を荒立てているんだ、コイツは？」

「さあ？　ぼくには分かりかねますね。……ただ、もしかすると話に混ざれなくて寂しかったのかもしれない」

「そうなのか？」

「ンなわけないでしょうっ！！　あんなわけのわからない話なんかに混ざりたいだなんて微塵も思いませんでしたよ！！　つーかアンタら実は結構仲良いですよえっ！？　実は何気に、良い雰囲気のお喫茶店か何かでお茶するくらいの仲なんですよ！！？」

すると、二人が黙ってしまった。気まずそうに互いに顔を背ける。

え？　ええ！？　まさか……いや、でもあり得ることはない。お客さんが最初に言った言葉は、ぼくや妹さんに対する嫉妬とも取れなくもないし、《いおり》で名前が出てきた途端に西牟婁さんの顔が渋ったのも、そういうことだと考えれなくもない。まさかまさか、本当に——？

「……………本当にそういう関係なんですか……………？」

「違う」「違います」

即答だった。しかも二人の声がハモってた。こんな反応をされては益々もってばくの疑心が増大してしまう……のだけど、こちらを睨んでくる西牟婁さんの顔が尋常じゃなく怖いので追求するのは止めておこう。「で、ですよー……」と、額に冷や汗をかきつつ声を出す。好奇心で身を滅ぼすっていうのはよくある話だ。そんなマングに出てくる空気の読めない主人公が陥りそうな展開で死にたくはない。

「——ったく、お前の所為でウチの家畜が不気味な勘違いをしだしたじゃないか、どうしてくれる」

「いや、勘違いされたのはぼくの所為じゃありませんよ。どちらかと言えば西牟婁さんの所為です」

いえ、ぼくをあんな考えに導いたのはあなた方の反応の所為なので、どちらかと言えば西牟婁さんとお客さん二人の所為です。

なんて言ったらどうなるんだろうか？

少しばかり好奇心が芽生えたものの、さっきの二の舞になることは分かり切っているのでぐっと堪える。

「というか、帰るんじゃないかったのか？ さっさと帰れ。これ以上家畜に勘違いされては堪らない」

「まあ、帰りますけど。くれぐれも、よろしくお願いしますよ」

何だか意味深な言葉を残しつつ、お客さんはソファから立ち上がった。「帰れ帰れー」と、囃し立てる西牟婁さんを背中にドアに向かって歩きだす。

——しかし、どうして前にまっすぐ歩けるんだろう。

ふと、疑問に思った。包帯で目を隠してるって言うのに、お客さんはまるで前が見えているみたいに平然と歩いている。あれだろうか。マンガなんかでよくある、心の眼で見るとヤツ。

なんて、お客さんを呆然と眺めながら馬鹿げたことを思考していると、

「これからも妹をよろしくお願いします」

「へ……っ？」

すれ違い様、お客さんがぼくの耳元で囁いた。………妹………
………誰？ これからもってことはぼくの知り合いなんだろうけど………はつきり言ってわからない。

「妹って……」

誰なんですか？ と振り向いた時には、もうお客さんはいなかった。代わりに、ボタン、と音をたてるドアが視界に映る。どうやら出て行ってしまったらしい。慌ててドアを開けてみるも、そこに黒い人影は見当たらない。

「何とも不思議な人ですね」

ドアを閉めながら呟く。

「馬鹿な奴、の間違いだろう？」

西牟婁さんが溜息混じりに答えた。いつの間にか、片手にはコーヒーの注がれたマグカップが握られている。

「ところで西牟婁さん。さっきのお客さんって誰なんですか？」

「知りたいか？」

西牟婁さんが意地の悪い笑みを浮かべる。

「まあ、無理にとは言いませんけど」

……何か知らないけど彼の妹をよろしくお願いされてしまったし。

西牟婁さんがコーヒーを一口啜る。

「あいつはただの殺人鬼だよ」

「……へ？」

何か今、西牟婁さんの口からただならぬ単語が聞こえてきたようない感じがするんですが……。

困惑を隠せないばかりを無視して西牟婁さんは言葉を続ける。

「ただの嘘つき、と言い換えることもできるがな」

「……………えっと、要するに、あの人は…………殺人鬼、で嘘つき、っていうことですか？」

「ん。まあ、近からずも遠からず、といったところだな」

「……はあ。……ですか……」

というか、それが本当であるなら一刻も早く警察に通報した方が
よろしいのではないでしょーか。

そんなことを思いながらも口に出すことができない小心者のぼく。
そしてそんなヘタレが戸惑っている様子を眺め、可笑しそうに笑う
西牟婁さん。この人、心底捻くれてるよなあ。

「西牟婁さんって友達いないでしょ」

「まあな」

……何で誇らしげに答えるんだろうか……。

「寂しい人ですねえ」

「せっかく長くなった夏休みを、こんな所で過ごそうとする君には
言われたくないな」

「……………」

……………全く持ってその通りですよ……………。

二話：ハイセンスな二人（後書き）

登場人物明記

・ 蓼科樹理……一応、主人公。童顔で背が低いこと以外はフツートの恋する高校生。姉が二人いる。ツツコミかボケかで言ったらボケ。

・ 絹川翠……ヒロイン。美少女というよりは美人にカテゴリーされる外見で、どこか達観したところがある。

・ 蓼科麻樹……樹理の姉。三人姉弟の一番上。二十一歳の現役大学生。自由奔放な性格。

・ 椎名美月……ザ・無表情。樹理のクラスメイト。可愛いものが好き。

・ 女の子……小学生くらいの女の子。美月と仲が良いご様子。クールな雰囲気。

・ 西牟婁枢……何故か出てきた自称《魔女》。緑髪に白衣の二十代。

・ 黒服のお客さん《くろふくのおきやくさん》……曰く、殺人鬼とも嘘つきとも呼べる人。ザ・無表情。

三話：トモダチ話（前書き）

『助けて』

三話…トモダチ話

「まいどね」

気さくに手を振りながら窓から出て行く泥棒さんを見送って、染々と呟く。

「しかし、西牟婁さんは友達がいらないのに知り合いだけが多いですよねぇ。まだ朝だったのに、五人もお客さんが来ましたよ」

そして、ぼくはその度に西牟婁さんに無理矢理起こされてお茶汲みをさせられた。

暇が出来る度にお客さん用のソファアを専用のベッドとして使っていたのは、確かにぼくが悪いかもしれないけれど、でも寝ている人間の口の中に熱々のコーヒーを流し込むのは、さすがに酷いんじゃないかと思う。

ぼく、苦いの苦手なのになぁ……。

——因みに、五人のお客さんというのは、ぼくよりも前に来ていた黒尽くしの殺人鬼で嘘つきな人と、深く被ったニット帽の影で目が隠れている嘘つきさん。それからニート兼ホームレス兼探偵の人（本人は探偵じゃないって言ってたけど）に、眼鏡を掛けていてクールな物腰の文学少年ときて、そして最後は、如何にもそれな格好をした二十歳前後の泥棒さんだ。

西牟婁さんにこんなにも知り合いがいる、ということにも確かに驚きだけど、でもそれよりも色が濃過ぎだと思う。どうしたら、こ

んな変人ばかりと知り合いになれるのだろうか？

それを訊ねると、

「こういう仕事をしていれば、嫌でも様々な人間と関わらなくてはいけないからな」

と、苦笑混じりに答えてくれた。

こういう仕事と言われても……、未だぼくには西牟婁さんの仕事の全貌が掴みきれないのだけど。

巷で噂の情報屋なのかと思えば、なんかさっきは泥棒さんから折れた刀を買い取っていたし。でも、ニット帽を被った嘘つきさんには家賃の安いアパートを紹介していたから、骨董屋さんってわけでもなさそうだし。

「一体、西牟婁さんの仕事って何なんですか？」

「なんだ？ 君は仕事の内容を知りもしないで、働きたいなんて言っていたのか？ 全く、とんでもないな。どんな人間でも自分の働き口については調べるものだぞ？」

呆れた様子の西牟婁さんに、ぼくはむっと唇を尖らせる。

「それは、西牟婁さんが教えてくれないからじゃないですか」

「ん？ 自分の責任を私に転嫁するのか？ そもそも、君は二週間もの間、ここで仕事の手伝いをしているじゃないか。これだけ時間が経てば自ずとその全容もわかるものだ、私は思うのだが？」

不敵に紡がれた西牟婁さんの反論の余地もない言葉が、さながら弾丸の如くぼくの胸を穿つ。

「むむう……、ホントに西牟婁さんは底意地が悪いですよね……」

「ふふっ、それは私に対する最高の褒め言葉だよ」

私を不快にさせたいのなら、もっと違う言葉で罵倒しろ、と西牟婁さんは微笑む。

その顔だけを見れば、ちょっとだけ変わった髪の色をした美人さんなんだけどなあ……。神様って残酷ですよネ。

「君、今失礼なことを考えているだろう？」

一体どういった構造でできているのだろう。ぼくの思考を読み取ったかのようなタイミングで、西牟婁さんがジトツとした目で睨んできた。

「そ、そんなわけありませんよ……っ！　ぼくはたった今、アンドロメダ第七星雲にいるリトルグレイの親友であるマイクについて思いを馳せていたところですよっ！！」

「分かりやすい嘘を吐くな。君に友達なんているわけがないじゃないか」

「まさか、そっちを否定されるとは思ってもよらなかったっ！！」

確かに嘘だけでも……。

確かに嘘だけでもさっ!!

「てか、ぼくにだって友達くらいいますよ! ……………少ないですけど…………」

「ほう。では、一体何人いると言うんだい? 一人、二人だなんて、言わないよな?」

西牟婁さんがいたずらっ子の顔で笑う。たぶん、またぼくが変な意地を張ったとか思ってるんだらうけど…………しかし! そう何度も自滅するぼくじゃない! それに西牟婁さんを見返してやりたい…………!!

そんな想いを胸中に抱えつつ、西牟婁さんの言葉に力一杯頷く。

「勿論ですよっ!! えゝっつとですねえ。まず、佐藤くんでしょう…………」

「…………おい、私は何人いるかを訊ねたんだ。個人名を上げるな。そして、指を折って数えるな。今時そんなことは、小学生だってしないぞ」

呆れ顔でそんなことを言う西牟婁さんに、しかしぼくは構ってないといられない。今時でなくても小学生は指を折って数えたりはしないですよ、とツツコミを入れる代わりに、

「ちょっと静かにして下さいよ。今思い出してるんですから」

と適当に返して、記憶を遡ることに集中する。

「鈴木くんでしょう、斎藤くんでしょう……」

「だから、指を折って数えるなど言っているだろうに……。というか、君は単に日本に多い名字を上げているだけではないだろうか？ 本当に君の友人の名前なのか？」

「田中くんでしょう」

「……無視するなよ……」

西牟婁さんは軽く舌打ちをして、不服そうな顔で机に肘を突く。

「あとは、椎名と絹川……かな」

と、そこで西牟婁さんが一瞬だけ虚を突かれたような顔になって、それから深々と溜息を吐いた。

「な、何ですか……」とたじろぐ。

なんか、哀れみみたいなものが混じっているような、可哀想なものを見るような視線を向けられている気がする。……もしかしてぼくは、西牟婁さんに哀れまれるほどに友達がいらない、残念な人間なのだろうか？

ぼくが不安に苛まれていると、案の定、西牟婁は「残念だな……」と顔を俯かせた。

「残念って……やっぱり……」

やっぱり、ぼくは残念な人間なんですか？ と言いつけたところで、西牟婁さんが口を開く。

「椎名って、椎名美月だろ？ あいつはお前のことを友人だとは思っていないぞ」

「へ？」

思いがけない言葉に硬直するぼく。

「とは言っても、君が嫌われているというわけではない、……と思う。どうしてか知らんが、あいつは自分に友人なんかいないのだと思っているんだよ」

「え？ え？ —— つか西牟婁さん、椎名のこと知ってるんですか？」

「さっき言っただろ？ こういう仕事をしていれば、嫌でも様々な人間と関わらなければならない、と。最早、私と知り合いじゃない人間なんて、この世界のどこにもいないかもしれないぞ？」

「『しれないぞ？』って……自分のことなのに何で疑問形なんですか……。つか、いや、それよりも、本当に椎名に嫌われてないんですか？」

友達と思われていないって、それはつまり嫌われてるってことだと、ぼくは思うのだけど。

「ま、嫌われている、ということはないだろうな。そもそもあいつは、興味がなかったことにはとことん関心を示さないからな。他人に気を掛けることなんて無いに等しいぞ」

「……………そっすか」

興味がないって……、ある意味嫌われるよりも残念な立ち位置じゃないだろうか……。よく、『好き』の反対は『無関心』って言うし。

なんか……、ストレートに身構えていたのにアッパーが飛んできた、みたい気分だ。

「……ぼくは今、ここの窓から飛び降りたい衝動に駆られています……」

「じゃあ、飛び降りればいい。大丈夫だ。死体処理なら私の知り合いが何とかする。心置きなくコンクリートに激突して潰れろ」

「ここは止めるところでしょ……」

「私は個人の意見を尊重する。さあ、地面に顔面をぶつけて五臓六腑を撒き散らし、無様な姿を晒すがいい」

「……やっぱ、止めときます……」

そうしておけ、と西牟婁さんはコーヒートを啜る。その姿をジト目で眺めていると、ふと、疑問が浮かんだ。

——この人、何をしたら動揺するんだろうか？

そもそも、西牟婁さんが動揺する姿というモノが想像つかない。地球が爆発するって言われても、この人は平然とコーヒートを飲んでいそうだ。それどころか「ほう、それはそれは」と、他人事のよう

に受け止めてみせるのかもしれない。

……………、よし。

「西牟婁さん」

「何だ？」

「今まで隠していたんですが、実はぼくの一人称は『俺』だったんですよ」

「……………、それがどうした？」

「驚きましたか？」

「——いや、全然……」

不思議そうな瞳でぼくを見返しながら、西牟婁さんは否定を口にする。

「そうですか……」

これでも驚かないなんて……、やっぱりこの人はどんなことをされても動揺しないのか。

ぼくが愕然と肩を落としていると、それを見た西牟婁さんが呆れた様子で軽く息を吐いた。

「馬鹿だ馬鹿だとは思っていたが、しかしここまで馬鹿だったとはな。ま、そこが君の取り柄でもあるんだが——」

どうやら、ぼくがやろうとしていたことに気付いたようだった。
やれやれ、と西牟婁さんは首を振る。

いや、それより――

「ぼくの取り柄って、馬鹿なところなんですか……？」

「ああ」

断言されてしまった。

しかも即答だよ……。

「……………」

再び肩を落とすぼく。

取り柄が馬鹿なところって……、ぼくはどれだけ救いようがない人間なんだろうか。

「いいじゃないか。馬鹿というのも、中々どうして捨てた物ではないぞ？ 何せ、馬鹿の周りには笑いが絶えない」

「その笑って、嘲笑でしょ……」

「そうだが？」

何の問題がある、と澄まし顔の西牟婁さん。

……ホント、天然なのかそうじゃないのか、はつきりして欲しい。

「問題だらけに決まってるじゃないですかっ。一体、どこの誰が自分のことを馬鹿にされて不満に思わない人間がいると言うんですか！？」

「今そこで、ソファアの背もたれに手をついてうなだれている」

「ぼくはそんなにM（マゾ）。穿った言い方をするなら、苛められることに快感を感じる人のこと）じゃないっ！」

「マゾであることは認めるのか……？」

西牟婁さんが恐々と顔を引き吊らせて身を退いていた。

あはは、西牟婁さんったら演技も上手いなあ……。

——、……演技……ですよ、ね……？

こほん、と咳払い。ついでに咽せた。

「ぼくはMじゃありません」

「咽せてまで咳払いしたのに話題変えないんだ……」

——あ……。

「ぼくは馬鹿デモアリマセン」

「どうしていきなり片言？　それも途中から」

「言っている途中で思い付いたからです。だから、ぼくを雇って下さい」

「最早、文脈が滅茶苦茶ね。急に元に戻るし。……はあ、いいわ。仕事をあげるわけにはいかないけど、お使いならさせてあげる」

「やったあ——っ!!」

「どうしてお使いでそんなにテンションが上がるのかしら……」

西牟婁さんが額に手をあててうなだれる。

因みに、西牟婁さんは素になると普通の口調に戻る傾向があるらしい。こういうスイッチで素に切り替わるのかは、分からないけれど。

——と、ここで西牟婁さんは自分が素に戻っていることに気が付いたらしく、ハツとした顔をした後に頬を少しだけ赤らめ、それから何事も無かったかのように毅然とした態度に戻る。

……一応、西牟婁さんの行動を一部始終見ていたわけだけど、西牟婁さんが「ふっふっ、気付かれてないぜ」みたいなことを言いだしそうなほど達成感のある清々しい顔をしているから、うん、ぼくも見なかったことにしておこう。

これぞ『オ・ト・ナ』な対応ですな。

「で、お使いって何ですか？」

「ん？　——ああ」

そうだった、と小声で呟く西牟婁さんの声を、ぼくは聞き逃さなかった。

まあ、だからと言って何かあるわけでもないけど。

「これを、標津川の所まで届けて貰いたいんだ」

そう言って、西牟婁さんが机の上に何かを置く。

——赤いスポーツバッグだった。

「何が入ってるんですか？」

「ん？　ただの折れた刀だよ」

「それって、さっき泥棒さんから買い取ってた？」

「ああ。まあ、別に気にすることでもないんだが、——直せばまた、何かに使えるかもしれないからな」

「——はあ、わかりましたけど……でも、刀直しちゃったら、銃刀法違反になるんじゃないんですか？」

銃刀法について詳しくはないけれど、刀がそれに違反するのは容易に想像がつく。

しかし、西牟婁さんは平然と答える。

「そこら辺は上手くやるさ。君は何も考えずに、ただパシリになつてくればいいんだよ」

「そういう問題じゃないと思いますが……………西牟婁さんがいいつて言うなら、いいんですけど」

じゃあ、行ってきます、と西牟婁さんに背中を向ける。

「いってらっしゃい」

その声を最後に、ぼくは西牟婁事務所を後にした。

四話：降りだした不運（前書き）

『死にたいよ』

四話：降りだした不運

『やめて。』

運命なんて安い言葉で片付けないで。

奇跡なんて曖昧なもので私の愛を否定しないで。

貴方がどうかは知らないけれど、私は本当に貴方を愛しているの。

どうか——それを嘘にしないで』

これは誰の言葉だったか。確か、マンガか何かのヒロインの台詞だった気がする。

『君と出会えた奇跡に感謝しよう』とか『僕と君は結ばれる運命なんだ』とか、キザなことを事ある毎に言って女の子を口説いていた主人公に、ヒロインの一人が言った言葉。

何て名前の作品だったのか、どんな場面で言った台詞なのかも覚えてないけれど、この台詞を聞いた（あるいは読んだ）とき、秀逸だな、と思ったのは覚えている。

彼は『奇跡』や『運命』なんて言葉を多用してロマンチックに愛を語っていたけれど——少なくとも、ぼくにはそう思えたけれど——でも確かに彼は、『愛してる』とか『好きだ』とか直接的な言葉を使って想いを伝えたことは、一度としてなかった。

——ような気がする。

「『私の愛を否定しないで』、か……」

ぼくは誰かに好意を向けられたとき、果たしてその愛を受け入れられるのだろうか。果たしてその人を拒絶せずにいられるだろうか。ぼくに、彼のようなロマンチックに語る話術とか、語彙力とか、そもそも女性に対する余裕とかがあるとは思ってもいけないけれど、ぼくがそういう状況になったとき、相手をできるだけ傷付けることがなければいいと、そう思う。

……………。

「……なんて」

頭を振る。

ぼくはなんてことを考えているんだろう。こんなネガティブな思考はぼくらしくない。昼過ぎ辺りから曇天になった所為だろう、思考回路までが陰鬱としてきたらしい。

「はぁ……、嫌だ嫌だ。嫌だね、どうも」

呟きつつも、しかし頭の中を渦巻く暗いオーラは消えてはくれない。というか、もっと気分が重たくなった。もう一度溜息を吐いて、肩からたすき掛けした赤いスポーツバッグをプラプラと揺り動かしながら、横断歩道を渡る。

西牟婁さんから言われた通りの場所まで行って、標津川さんに折

れた刀を届け終え、今は家に帰っている途中なのだけれど、しかしごく遠かった。——うん、遠かった。九つくらい先の駅だし、『郊外のそのまた郊外』みたいな場所だったから快速電車も停まらないし。お陰でもう夕方だよ……。

「——ま、でも、標津川さんはやっぱりいい人だったなあ」

彼と会えたってだけでも、これだけの時間を掛けておつかいに行った甲斐があったなあ、なんて思うぼくは安い人間なんでしょうかね？ …………… いやいや、西牟婁さんの役に立っっていう大前提があつての標津川さんだけどね？ ——ってぼく、何で頭の中で言い訳してんだろ。

「はあ……」

再三にわたって溜息を吐く。いやはや、ホントにもう、嫌だよね。何て言うか、こう……………、嫌だよね。うん。

……………。

うまく説明できないけれど、嫌なものは嫌なのっ！ それが真理ですっ！！

「——あっ」

視界の端に映った建物に、声が漏れた。

停止した映像のごとく動きを止め、首だけを左に回す。と、そこには白と青を基調としたコンビニ。

そういえば、今週の最新刊、まだ読んでなかったな。

当たり前のようにそんなことを思考した後は即断即決。家に直帰する予定を急遽変更して、コンビニに向かう為体の向きを左に転換する。

——しかし、コンビニを見て連想するのがマンガの週刊誌ってのが、ぼくの人柄を表してそうだね。いや、悪いことだってわかってるんだけど、コンビニを見掛けるとついね、立ち読みしたくなっちゃうんだよ。わかるでしょ？

ってことで、妖精に森の奥へと誘われるかのようなフラフラとした足取りでコンビニに潜入する。

「いらっしやあせー」

気の抜けるような店員の挨拶に会釈しつつ、手前の棚を右に折れて、本棚の前に立つ。

——と。

「あっ」

そんな声が左隣から聞こえてきた。

何だ？ 肩でもぶつかってしまったのかな？ いやでもそんな感触はなかったし……、と思考を巡らせつつマンガを読むふりをして隣に立っている人の顔を伺うと、その人は正面を見て「ああ、やっぱりか……」と今にも額に手を当ててしまいそうな顔をしていた。

よかった。とりあえずぼくが何か迷惑をかけた訳じゃなかったみたいだ。ほっと胸を撫で下ろして、それから、どうしたのかと隣の人の視線を追った。

隣の人の視線は、本棚の上にあるガラスの、そのガラスの向こうに見える路地に向けられていた。

「――」

あーあ、やっぱりか……。

そう呟きたい気持ちを抑えて外を眺める。

ガラスの向こうでは、空からポツリポツリと雨粒が降っていて、雨粒はゆっくりだけどその量を増やしながらコンクリートの地面を叩いている。

「――雨だ」

なんとなく声に出してみた。しかし、だから何だと言われてしまえばそれでおしまいだし、それにそんな突っ込みをいれてくれる人もない。手に取った週刊誌を開いてその内容に目を落とす。

男の子がいた。

ぼくと同じ年くらいの男の子。髪は黄色くてボサボサ。学生服を着込んでいて、そして右手には黄金色に輝く片刃の洋剣を持っている。

洋剣は彼の英雄が扱ったとされる、時として『きらめく剣』とも

呼ばれる聖剣をモチーフとしたロングソード。その全長は男の子の背丈と同じくらいで、どこにでも在りそうな、十字架を思わせる形状をしている。十字鰐だけが青で塗装されたその剣にはこれと言った飾りはなく、どこまでも単調な、剣としての形式美だけを追及していた。

雑誌のカラーページに描かれた口絵を、愛しい恋人を見つめるような心持ちで眺め、ほう、と息を吐く。

やっぱり、この作家さんの絵はいい。凄くいい。どこがいいのかと言えば、それは全てだと言ってもいいのだけれど、特に聖剣の——いや、聖剣に限らずこの作家さんの描く刃物のどれもが、凄く凄くいい。

しなやかで鋭くて滑らかで武骨。煌めく刀身は繊細で強靱。刃の格好の良さを見せつつも、刃物としての危うさも内包していて、凶器としての妖しさと武器としての輝かしさを両立するその全貌は、素朴でありながら心を奪われるほど貴やかだ。

しばらくの間、口絵に描かれた聖剣を眺めた後、ページを捲って話を読み進めていく。

今回は、主人公の男の子が拐われた女の子を助けに行く、という話だった。

悪い奴ら——男の子と敵対する組織に連れ拐われた女の子を、男の子が聖剣を片手に助けに行く、という取り分け珍しいとも言えない、と言うか実にありふれた内容。

だけど、どうしてかぼくは胸の奥が苦しくなるのを感じた。

何故だか悲しい。

自分ができなかったことを軽々と成功させてしまったような、自分の駄目さ加減をまざまざと見せ付けられたような、そんな感覚。

——まだ、ぼくはそんなマンガなような経験なんてしたことがないのに……。

——。やっぱり、悪天候な所為だろうか。雨も降ってるし、そろそろ帰った方がいいのかもしれない。

マンガの週刊誌とビニール傘を取ってレジに持っていき、九百八十円を払ってコンビニから出る。「ありあとやした」と、またも気の抜けるような挨拶をする店員に、またも会釈しながら自動ドアを潜ると早速ビニール傘を開いた。

ポツポツと、雨粒が傘を叩く。

雨はじわじわとその勢いを増し、傘から響く音は次第にその間隔を短くしていき、その断続的な擬音は、ゆっくりと途絶えることのない雑音に変貌しようとしている。

地面を見れば辺りは水浸し。路上にはいくつもの水溜まりが形成されていて、時折通過する車がその水を左右にばら蒔いていた。

そんな中、ぼくは傘を差して歩いている。

一人、雨に当たることなく歩いている。

表通りを十分ほど歩いて、左手に現れた曲がり角を曲がる。それからまた十五分くらい歩くと、住宅街に出た。

そう言えば、と思い出すのは、今朝あった女の子二人組。家に帰ってあればいいのだけど、とありがた迷惑な心配をしつつ、更に五分掛けて住宅地を歩いてようやく家に着いた。

見上げる我が家は実に普通。白い外壁に青い屋根。二階建て故縦に長く、そして敷地が小さい為横幅は狭い。玄関の前には申し訳程度に小さな門があるけれど、いつも開けっ放しだからその意味を成さない。こんな、何でもウェルカムな受け入れ体勢で、よくもまあ泥棒が入らなかったものだ。ここいらは空き巣が多いというのに、未だこの家は何も盗られたことがない。……逆に入りにくいのかな？

そんな防犯意識ゼロな門を通って玄関の前に。ビニール傘を閉じて、水滴を払うこともなく傘立てに突き刺すとドアを開いて家の中に潜り込む。

「――！！」

「――」

？ 中から聞こえてくるのは誰かの会話。

前者は姉貴だとして、じゃあ相手は誰だろう。結構高い声だからとりあえずお父さんじゃない。そもそもお父さんがこんな時間に帰って来てたら問題だ。じゃあ、姉さんだろうか？ ううん、それはあり得るかも。何せ、あの二人は仲が悪い。姉さんは帰ってくる度に姉貴とケンカしてる。ただ、こんな中途半端な時期に姉さんが帰ってくる筈ないし、姉貴じゃない人物の方は怒鳴っているって雰囲気

気じゃない。だから、姉さんでもない。

なら誰だろう？ と首を捻りながら靴を脱ぐ。とんとん、と廊下を駆けてリビングへ。

——と。

そこには——、

「あ、愚弟が帰ってきた」

と、失礼にも人指し指を向けてくる姉貴と、

「あ——」

その姉貴に抱き付かれた状態で呆然とぼくの顔を見る絹川がいた。

「——え？」

頭が真っ白になる。

何、で……絹川、がここに………？ ——いや、嬉しいのは嬉しいんだけど、でも、………何で？ どうして？ そもそも何で住所知ってんの？ 教えた覚えなんてないのに。

ぐるぐるぐるぐると渦巻く言葉。頭の中を忙しく駆け回っていて収拾がつかない。まとめようにも頭は色んな機能を忘れているから考えをまとめられない。

そんなぼくに、絹川に抱き付いたままの姉貴が問い掛けてくる。

「——で、この子、アンタの知り合い？」

……………ここで『友達』とも『恋人』とも言わないのが、実に姉貴らしい。

五話：女子は怖い（前書き）

『今日の晩ご飯はコロッケがいいな』

P・S

バニラアイスなんかを買ってきてくれると、私が大変喜びます
（≡▽≡）↑こんな感じ（笑）』

五話：女子は怖い

「と――」

姉貴の問いに対して、友達だよ、と答えようとして、午前中に西牟婁さんと交わした会話を思い出した。

『椎名って、椎名美月だろ？ あいつはお前のことを友人だとは思っていないぞ』

「……………」

『友達』という言葉が急激に怖くなった。

口が渴く。声が出ない。胸の奥から不安が無尽蔵に溢れ出してくる。

――友達って言って、絹川から否定されたらどうしよう……っ！
！ そうしたらもう、ぼくは立ち直れないかもしれない！

「『と』……………?」

姉貴がいやらしく微笑みながら、続きを促してくる。うう……、この姉貴はあの《魔女》さんにも匹敵するくらいに底意地が悪い。いや、お酒を飲んだらもっと悪くなるから《魔女》さん以上かもしれない。

れない。……魔女の上ってなんだろう？ 悪魔？

「——あ、あの……っ！ 私は………」

「あつ、貴女は黙っててね。私はこの愚弟に訊いてるの」

有無を言わせぬ姉貴の、お願いという名の強制。助け船を出そうとしてくれた絹川は一言で押さえ付けられ、しゅんと身を縮こませて頭を垂れる。

——その光景に、いとも容易く頭の線がキレた。

「——ああもうっ！！ どうだっていいでしょそんなこと！ 姉貴には全く全然これっぽっちも、一ミリどころか一ミクロン単位でだって関係ないんだからさっ！ 『とりあえずぼくの部屋に行こう』って言おうとしたんだよ、それでいいでしょ、はいおしまい。これにて終了。だから姉貴は独りでやけ酒でもして不貞腐れてろっ！！」

叫び終えた頃には、ドン、と音を響かせ、リビングのドアを力任せに閉めていた。怒りをぶつけるようにして床を踏みつけながら廊下を進み、そして階段を上る。最後の段を踏みつけたところで右に向き直って、その突き当たりにある部屋に入る。パチン、と壁にある電灯のスイッチを入れると、暗がりには包まれていたその全貌が明確になった。

視界に映るのは、折り畳み式の簡易ベッドと小さな本棚があるだけの、我ながら殺風景で色のない六畳半の自室。南方に一つだけある窓はカーテンがなく、開きっぱなし。そこから入ってくる、ざあああと続く騒音に不快感を抱きながらも、しかし窓を閉じる気にもなれずベッドにこの身を投げ出そうとして——

「…………あ、あの、樹理…………くん…………?」

絹川の存在に気がついた。

「あれっ!?! 何で絹川がここにいるの!?!」

「いや、何でって……、樹理くんが私の手を引っ張って連れてきたんだけど……………」

これ、と絹川が持ち上げてみせた左手の手首を、ぼくの右手がしっかりと握っていた。

「あれえっ!?! どうしてぼくが絹川の手首を握ってるのっ!?!」

慌てて手を放して、ついでに一步後退して距離をとる。カー、と顔が熱くなるのを感じた。

「リビングから出ていく時に、私をお姉さんから引き剥がしてそのまま引っ張ってきたんだよ? 覚えてないの?」

「ううん…………」

覚えてると言えば覚えてるような……。——うわっ、てことはぼく、絹川の手を握っちゃってたわけだ! いや、手首だけど! うわうわっ、我ながら畏れ多いことを無意識の内にやって退けるなんて…………っ! せめて意識下にある内に握っていたかった! いや、意識があつたら握れなかったらうけども!!

うわああっ!! と頭を抱えて苦悶するぼく。

しかし、ちらりと絹川を見れば、ぼくの動向など一切気にすることなく、興味深そうに部屋の中をキョロキョロと見渡していた。

「……………」

……何だか、とても虚しくなりました。

「ふうん、樹理くんの部屋ってこんななんだ」

「……………、うん。殺風景でしょ？」

「ま、そうだね。お世辞にも華やかとは、言えないかな。でも、きちんと整理はしてるんだ。ちよつと意外かも」

男の子の部屋は散らかってるってよく聞くから、と絹川。開きっぱなしだった窓を閉めると、簡易ベッドの上に腰を下ろした。自然、ぼくは何にも敷かれていないフローリングの床に座る。……しかし、男の部屋に来てベッドに座るって、どうなんでしょうかね？ これはOKサイン？ それともぼくが男として扱われていないだけ？ ……………後者の方が可能性が高そうなので、下手なことをせずに会話を続けよう。

「まあ、物がないから散らかす余地がないんだよ」

あはは、と後頭部を掻きながらの苦笑する。何とも情けない限りであります。

「ふうん、そうなんだ。……あ、でも、入学式の日自己紹介で言っただけだった？ 刃物集めるのが趣味だ、って」

どこにあるの？ と訊いてくる絹川に、ぼくは「うつ……………」と後ずさる。それはぼくのトラウマですよ絹川さんっ！

「？ どうしたの？ まさか嘘だった、とか……………」

絹川嬢が、軽蔑するような、嫌いな物を見る時のような視線をぼくに向けてきた。

慌てて首と両手をブンブン振る。

「いや…………っ、違うよ！ 嘘なんか吐いてないよ！ 今までの人生で一度も嘘を吐いたことがない正直者のぼくが嘘なんか吐くわけないじゃないかっ！！」

「既にそれが嘘だね」

「即行バレたっ！？」

どうしてこう、ぼくの嘘ってすぐバレるんだろう？

絹川がハア、と溜息を吐く。

「あのね、樹理くん。『一度も嘘を吐いたことがない』なんて、そんなの絶対にあり得ないんだよ。生まれつきの正直者だって、十六年も生きてたら一度は嘘を吐くんだから」

「…………はい、すみません。ぼく、嘘吐きました…………」

「それはわかってる。じゃ、どうしてキミは嘘を吐いたの？」

うう……、なんか教師に叱られてるみたいな気分だ。自然と胡座から正座へと姿勢を正してしまう。

「いや……、どうしてって言われると……」

ホントのことが言いたくなかったから、と言うか……思い出したくないから、と言うか……。

「何？ 私に言えないようなことなの？」

「……いえ……、別に言えないようなことではないんですが……」

言いたくはないんです。記憶から抹消したいんです。なかったことにしたいんです……っ！

しかし、ベッドに鎮座する絹川先生はぼくみたいな一介の生徒の気持ち汲み測ってはくれない。

「言えないようなことじゃないのなら言えるでしょ」

さ、言ってご覧なさい、と絹川（いや、そんな言い方はしてないけど）。

くそ……っ、仕方ない。覚悟を決めて言うしかないっ！

「……絹川がどう思ってるのかは知らないけど、あの自己紹介の所為で、クラスの大半の人達から避けられてるんだよね……」

「あー……」と絹川。どうやら理解してくれたようだ。

「確かに。第一印象があれじゃ、それも仕方ないかもね」

「……うん。同じ中学出身の人がいたら、また変わってたんだろうけど……、幸か不幸か全員別の中学出身だったから物凄くドン引きされた……」

言葉を口にする度に否応なしに脳裏を掠めるのは、三ヶ月ほど前の入学式。期待とか不安とかその他色々に胸を膨らませていた新入生の中で、その二割増くらい緊張していたぼくは、自己紹介の時に、

「蓼科樹理ですっ。趣味は刃物集めですっ！」

と言ってしまったのだ。

まず、この一言で教室内がざわめきだして、そしてその反応に戸惑って気が動転してしまったぼくは何を思ったのか、

「いや、まだ人は刺したことないんで大丈夫ですよ？」

なんて弁明をして、墓穴を掘ってしまったのだ。

これでもうクラスメイトはドン引き。あの無関心を決め込んでいた無気力な担任教師すらも顔を引きつらせていたし、「え？ 『人は』 ってことは動物は刺したことあるのかな？」 「それよりも『まだ』 って、いつか人を刺すつもりなの！？」 みたいな小声が口々に聞こえてきた。

そんなわけで、ぼくは入学式早々クラスメイトから畏怖の視線を

向けられるようになってしまったのでした。……ホントもう……、タイムマシンが欲しい……。

「じゃあ、もう捨てちゃったの？ 刃物コレクション」

「いや、押し入れにしまっただけよ」

「あ、そうなんだ……」

絹川が肩透かしを喰らったような顔をする。いや、呆れてるのかな？

確かに嫌な思い出が染み付いてしまったけど、せっかくあれだけ集めたんだから、捨てられるわけがないじゃないか!!

「何なら持ってくるけど、見る？」

「ううん。見ない」

「で、ですよー……」

即座に首を振られてしまった。

……ま、女の子はそういうのにあまり関心がないだろうしね。うん。そうだよ。きっとそう。ぼくが嫌われたってわけじゃないよ。……たぶん。

だから気をしっかり持つんだ、樹理！

というわけで（どういうわけ？）、気を取り直して話題転換を

試みる。

「――で、そう言えば何で絹川はぼくの家来てたの？」

「えっ！？」

うわっ、明らかに動揺してる！？　もしかして訊いちゃいけなかった！？

「……それ、今訊くの？」

眉をハの字にして、捨てられた仔犬みたいな表情を浮かべる絹川。

「うん。いや、まあ……」

興味がないではない。

恐る恐る頷くと、絹川はそっかー、と苦笑して、しかしそれから言葉を続けることなく俯いてしまった。

「あ、いや、言いたくないなら言わなくてもいいけどっ」

慌てて入れたフォローに、絹川が力なく首を振る。

「別に言いたくないってわけじゃないの。ただね……」

――と。

ポツリと、絹川の白い手の甲に、小さな雫が落ちた。

「!？」

な、泣いてる!？　もしかして泣いてますか絹川さんっ!？　も
しかしなくても泣いてますよね絹川さんっ!？　うっわ!!　ぼ
く女の子泣かせちゃいましたよっ!？　どうしよっ、『しかもベッ
ドの上にいる女の子を』だ!!　字面だけ見ると凄くヤラしく感じ
るのはぼくだけでしょかねっ!？　……………思考が脱線した。取
り合えず泣き止んで貰わないと。

体を震わせて忍び泣く絹川を見る。しかし女の子を泣き止ませる
方法って何だろう？　椎名はぼくのこと友達とは思っていないらし
いから、ぼく絹川以外の友達いないし、同学年で幼馴染みの女の
子もないし、妹もないし、姉は二人いるけど、姉さんが泣いて
いたという記憶はないし、姉貴には逆に泣かされた思い出しかない
し。…………あれ？　ぼくの周りには逆になに泣かされた思い出がない
二人だけ？　何この寂しい人間関係。青春が灰色に廃れてるよ……
ってそうじゃなくて、絹川を泣き止ませる方法だ!　…………何だろう。
うーん……………はっ!　そうだっ!!

「狼男って実は満月を見て変身するわけじゃないんだってさ」

「……………」

「……………」

スベったあああっ!!　ってか、何でぼくは泣いてる女の子相手に
ウンチク披露してるんだ!？　何で狼男の話なんてしてるんだっ
!？　馬鹿じゃないのか、ぼくは!!

『だな。とても男だとは思えねえ。人間のグズだな、まったく』

うわああああ！！　言われてしまったああああ！！　もう駄目だ絹川に嫌われた、絶っつ対に嫌われたっ！！　……………って、あれ？　絹川ってあんな男勝りな口調だったっけ？

「えーと……、さっきの声って、絹川……………？」

「……………こえ……………？」

はてな？　と首を傾げる絹川。涙に潤んだ目に、少し頬が紅潮する……………ではなくて、どうやら絹川の声ではないらしい。どころか声にも気付かなかったようだ。あれだけはっきり聞こえたというのに気付かなかったなんて、どれだけ泣くことに集中してたんだろう？

『やっぱ馬鹿だな、お前。馬鹿過ぎて馬鹿過ぎて嫌になるほどの馬鹿だ。あーあ、久しぶりの宿主がこんな馬鹿だなんて。はっきり言っただけだぜ。――さて、オレは今何回馬鹿って言ったでしょうか。こんな問題にも答えられない馬鹿でどうしようもない馬鹿な宿主には《キング・オブ・馬鹿》の称号を、宿主の身体と引き換えに進呈しようと思うんだがどうだ？』

何この声……………っ！？

慌てて絹川を見る。狼狽するばかりを不思議そうな顔で見上げていた。やっぱり声の主は絹川ではないらしい。ということは姉貴だろうか？

ドアを開け、その隙間から顔だけを出して廊下を覗いてみる。しかし、人影は見当たらない。

姉貴でもない？ だったら誰の声だ？ もしかしてユウ……いや違うってそんなわけないそんな非科学的な現象があったりなかったりするわけじゃないか……っ！！

「樹理くんが急に踊りだしたっ!？」

『お前、言動が滅茶苦茶だからな?』

挙動と思考を二人(?)から同時にツッコまれてしまった。

六話：ユウ……（前書き）

『今、コンビニにいるけど、何か欲しい物ある？』

二百円以内なら、お姉さんがおごってあげないこともないです

十分経っても返信がなければ何もいらないんだ、と解釈するからそのつもりで』

六話…ユウ……

「さっきからどうしたの？ 樹理くん何だか変だよ？」

「いや、どうしたもこうしたも、声がつ、ぼくの中でも絹川の間もない声が……！ 聞こえるでしょっ！？」

必死に絹川に訴えるも、絹川は訳がわからないとばかりに眉を下げる。

やーめーてーっ！ そんな反応しないでえ！ そんな在り来たりなパターンでぼくをホラーな世界に引き込まないでーっ！！

「さっきも言ってたけど、声って何？ 私には樹理くんの上擦った声しか聞こえないんだけど。空耳じゃないの？」

「いやいやっ、あんなにはっきりと聞こえてたよ！？」 『お前、言動が滅茶苦茶だからな？』 ってツツコまれたよ！？ 結構な美声だったよっ！？」

「最後の情報は必ずしも私に伝える必要があったのかな？ ……うん、でもそっか。もし樹理くんが言ってることがホントなら、もしかしてそれってユウ——」

「郵便配達の人じゃないと思うよっ！！」

絹川の声に被せるようにして、絹川の言葉を遮る。認めない。奴等の存在なんて、ぼくは断じて認めないぞ！

「……………」

「……………」

無言のまま向けられる視線が痛い……っ！ 胸に！ 心にグサグサ刺さってくるよっ！

「……もしかして樹理くんって、怪談嫌い？」

うわ、可愛い、とぼくにとってはあまり嬉しくない笑みを浮かべる絹川。

……何だか男の尊厳が消失の予感。ただでさえ外見に男要素が少ないというのに、内面まで消失してしまったら、絹川にとってのぼくの立場が『同年代だけど可愛い弟的存在』になってしまうかもしれない！ 何とか誤魔化さねば……っ！！

「キャトルミューティレーションとかグレイとかは、大好きですよ？」

「つまり、SFは得意だけどオカルトは苦手だと」

誤魔化しきれなかった……っ！！

男の尊厳一部消失！！ それにつき、『お化け屋敷で女の子に頼られる』という経験が出来なくなりました！！ いや、元からするつもりなかったけどねっ！！

『なら言うなよ……。つーか、オレ幽霊じゃねえし。やっぱ馬鹿だ

ろ、お前。どこからか声が聞こえてきたからって、それですぐに幽霊に考えがいくつてのがもう、頭の足りない馬鹿の発想だよな。まったく、せめてテレパシーに行き着くくらいの発想力を見せてほしかったぜ。SF好きが聞いて呆れるな。お前が好きなものは、SFはSFでもあれだろ。少し不思議、のSFだろ？ お前みたいな幼稚な馬鹿は、ケンカも勉強もダメダメな、青色タヌキに泣きつくしか能のない小五のメガネくんに感情移入でもしてろ、馬鹿』

「何だ！？ 十倍くらい罵倒をされるオプション付きのツツコミなんて誰もオーダーしてませんよっ！？」

「えっ？ 誰もツツコんでないし、罵倒もしてないよ！？」

『馬鹿を言え。さっきの台詞の全てがツツコミだ。ツツコミという名の罵倒だ。そんなこともわからない馬鹿はさっさと身体をオレに譲って死ねよ』

「今、サラッと罵倒だって認めてたよねっ！？ それと、さっきから身体を譲れ、みたいなこと言ってるけど何なのそれっ！？」

「ええっ！？ 認めてないし、そんなこと一言も言っていないよ、私っ！！」

『ウッセーな。これだから馬鹿は嫌なんだ。馬鹿は馬鹿らしく、黙って身体を明け渡せばいいのに、こういう時だけ無駄に頭を使おうとしやがる。どうせ頭を働かせたって一割も理解できないんだ。説明したって時間を無駄に消費するだけだ。オレがお前に教えることなんて何一つねえよ』

「凄い理不尽だっ！！」

「何がっ!？」

何だか、とてもカオスな状況になりました、まる。

閑話休題。

「取り敢えず、落ち着こう」

ベッドに座る絹川と、声だけをぼくに伝えてくる人(?)と、ついでに自分にも向けて言い聞かせる。

「う、うん。そうだね……」

『その女を混乱させたのはお前だけだな』

「そこ、うるさい」

「えええっ!？」

ぼくの言葉に戦慄く絹川。どうやら絹川には暴言を吐いてくる声が聞こえていないらしい。

『今更気付いたのかよ。お前ホントに馬鹿だな』

あと、コイツはどういうわけかぼくの思考を読むらしい。まった

く、プライバシーも何もあったもんじゃない。

『お前みたいな馬鹿にプライバシーなんてあるわけねえだろ。お前、それで人間気取りか？ ゴミにも満たないクズがつ！』

……無視だ、無視。無視をしよう。

『うわっ、馬鹿のくせにヒドイことするな。シカトは苛めに入るんだぜ？ 知ってるか？』

……………。

『うっわっ！！ コイツホントにシカトしやがった。皆さーん、馬鹿の脳内で苛めが起きてますよおー！！』

「ごめん、絹川。さっきのはちょっとしたインディアンジョークだからっ！」

「何だそっか、インディアンジョークかっ！ ………………って、インディアンジョークって何……………？」

やっぱり誤魔化せなかったか……………っ！！

『女がノリツツコミをしたってことは、スルーなのか？』

……………。

『チッ、もういい。もう話し掛けねえよっ！！ バーカっ！！』

「ねえ、インディアンジョークって何なの？ 樹理くん」

絹川が怪訝な眼差しをぼくに向けてくる。すいません。インディアンジョークなんてぼくも知らないです。そもそも、インディアンの人達ってジョーク言うの？ 自分で言っという何だけど、ぼくはインディアン関係には精通していませんのでわからない。……むう、ここはちよつとズルいけど、無理やり話題を変えることにしよう。

「それよりも絹川。もう落ち着いたことだし、どうしてぼくの家に来たのか教えてくれない？ ってか、どうしてぼくの家が住所がなかったの？」

若干早口で訊ねると、予想通り絹川は萎縮して下を向いた。だけど、今回は泣いていない。これはもしや話が聞けるかもしれない。思い付きだったけど、結構良い選択だったかも。

「住所は……《魔女》さん……って、樹理くんは知らないか。西牟婁枢っていう、情報屋さんに教えてもらったの……」

……………は？

一時硬直。

モジモジと申し訳なさそうにする絹川の可愛らしい姿を啞然として眺める。

そして再生。

「えええっ！ 絹川って西牟婁さんと知り合いなのっ！？」

「えっ！？ 樹理くん、《魔女》さんと知り合いだったのっ！？」

二人仲良くビックリ驚愕する。むむ、こんな所でも人の安寧を奪い去るなんて、さすが西牟婁さんだ。自称《魔女》なだけはある。ってか、西牟婁さんのことを《魔女》って呼んでる人を初めて見たよ……。

「い、いやまあ、ぼくはあの人の助手っていうか、パシリっていうか……うん、そんなところだよ……」

「そ、そっか、私は知り合いじゃないんだけど……、私の友達知り合いなの。同じクラスだったサキシマムクって娘なんだけど。知らない？」

「ああ、うん、知ってる」

確か、名前は『崎島』に『矛が来る』って書いて《崎島矛来》だったような……。席替えするまで隣だったから何となく憶えがある。角が丸い四角形のレンズでフレームが赤いメガネをかけた、大人しそうな子だったと思う。

と。

『《蓼科樹理》に《崎島矛来》、ねえ。「盾」と「矛」、「斬り」に「裂き」。「しな」と「しま」も一文字違いだし——へえ、中々どうして縁がありそうな名前じゃねえか。なあ、宿主』

何でぼくの名前を知ってるんだよ。つか、もう話し掛けないんじゃないかったの？

『お？ よく覚えてたな、馬鹿のくせに。ま、お前もオレを無視す

るつつつといて返事してるからお互い様だけどな』

！！ ぼっ、ぼくのはふきゃきょうりよくだよっ！！

『はいはい、不可抗力ね。思考の中で噛むなよな、まったく。それに「しまったあっ！！」って動揺してるのが駄々漏れだからな？

オレはお前の思考の隅々まで読めるんだから、嘘を吐くのは得策じゃないぜ？ ま、お前みたいな馬鹿の嘘は、思考が読めなくてもすぐにわかるけどな』

む、思考が読めなくてもすぐにわかる、っていうのは、西牟婁さんにも絹川にも嘘を見破られているから反論できないけど、ぼくの思考の隅々まで読めるっていうのはちよっと引っ掛かるな。ぼくには君の考えていることがさっぱり読めないんだけど。

『そりゃそうだろ。お前みたいな馬鹿に思考を読まれちゃ、博打もろくに打てやしないぜ。それに、オレはお前の潜在意識みたいなモノだからな。お前自身がオレを知ることを拒絶してんだよ』

せ、潜在意識……………？

『ま、それは追々話すとして、いいのか？ おい。女をほったらかしだぜ？』

！！ そ、そうだった。絹川と話してる途中だったんだ。

見ると、絹川は未だペラペラと崎島について話していた。ホッと胸を撫で下ろす。話を聞いていなかったことはバレていないようだ。

「——というわけで、崎島さんに西牟婁さんを紹介してもらって、

西牟婁さんから樹理くんの住所を聞いたの」

「……………へえ……………」

「?　どうかした?」

ぼくの反応に違和感を懷いたのか、絹川が不思議そうに首を傾げる。

いやまあ……、どうかしてるかしてないかと言えば、してるんだけど。うーむ、これは訊いていいのか、あるいはスルーした方がいいのか……。

『ふうん、確かにそりゃ気になるわな。だが、女なんてのは大体そうだぜ?　それに、被ってるってことは隠したいってことなんだから、ここはスルーしてやればいいんじゃない?』

ふむ、成る程一理ある。

『だろ?』

けど、キミの意見に従うのは癪だからここは思い切って訊いてみようか。

『……………おい』

訊いてみよう。

「絹川って、猫被りなの?」

「ふへえっ!?!」

猫被りというか、猫みたいな反応だった。

「ど、どうして……?」

気付いたのか、と続くのか、そんなことを訊くのか、と続くのか。しばらく待っても続かなかったので、取り敢えずどっちでも返答になるような、当たり障りのない答えを返す。

「特に理由はないんだけど。でも、絹川が今と教室とじゃ、全然感じが違うから」

教室での絹川は底抜けに明るくてクラスの中心みたいな感じがするのだけど、今の絹川は、何と言うか……どこか陰があって大人びているような感じがするのだ。最初は緊張しているのかと思ったけど、崎島のことを話している時はリラックスしていたみたいだから、どうやらそういうわけでもないみたいだし。——いやまあ、今の大人っぽい絹川も可愛いですけどね?

『そーゆーことはオレに言わず、その女に言え。んで、フラれてしまえ』

うっさい。キミはもう喋るな。

『そう言われると俄然喋りたくなるな』

.....。

『チッ』

絹川は恥ずかしそうに顔を赤らめて、「そうなの……」と溢した。

「そっか。——で、どっちが素なの？」

「へっ!？」

「いや、だから、今の絹川と学校の絹川、どっちが本物——っていうのとは違うのかな？ 素顔？ 真実？」

『ありのままのキミ、がいいんじゃないか。キザったらしくて吐き気がするところなんかお前にピッタリだ。それでフラれてしまえ』

「——まあとにかく、どっちが素の絹川なわけ？ それともどっちも猫被り？」

『また無視かよ。いい加減気付こうぜ。世の中無視できないことが沢山あるってことをさ』

「…………どっちが猫被りなのかって聞かれたら、……………やっぱり教室での方なの、かな？」

自信なさそうに小首を傾げる絹川。

いや、ぼくに訊かれなくても……。

「でもっ、別に猫を被ってたつもりはないんだよ？ ただ、周りに合わせていたっただけで」

「そ、そっかー」

『そういうのを猫被りっていうんじゃないの？』

絹川本人がああ言ってるんだから猫被りじゃないのっ！

『……さいですか』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7099n/>

泡沫-ウタカタ-

2011年5月17日06時08分発行